

中日伝統芸能の継承について

梁媚

要旨

洋の東西を問わず、古い時代から芸術の歴史的発展はそれぞれ民族独自の芸術精神によって特有の様式を生み、創造的成果を積み重ねてきた。本研究は、近代以降の伝統芸能に関する考察である。とりわけ、19世紀末から20世紀へと移り変わる激動の時代を生きた名人たちは、いわゆる古い伝統を受け継ぐ一方で、新しい文化や制度の影響を受けながら、伝統芸能のあり方を模索した。その研究の第一歩として、後に四大名旦とわれる梅蘭芳の初めての上海公演について紹介する。その事例を通じて、伝統芸能の継承と近代化の問題を考えたい。

中国では、譚鑫培は京劇の名優制を創立し、多くの名優が次々と登場した。また、19世紀中後期には、上海は租界に頼って経済的、政治的な特殊な枠組みを確立した。その後、京劇の既存の管理体制と収入分配体制を打破した。例えば、俳優は契約に応じて報酬を得て、契約以外は個人で自由に出演することができる。こうして、俳優の収入の増加に伴い、京劇俳優の社会的地位は大きく向上した政界でも財界でも京劇俳優の活躍が見られる。そして、京劇の継承や俳優の養成を応じて、数多くの科班が設立した。

例えば、「京劇第一科班」と称される富連成社である。四大名旦と称される女形の名人梅蘭芳も富連成社で芸を学び、11歳で初舞台を踏んだ。1913年、上海旦桂第一台は19歳の梅蘭芳を招待して公演し、一躍有名になった。梅蘭芳が創設した「梅派」芸術は、京劇旦行の中で最初に形成され、極めて深遠な京劇流派に影響を与えた。京劇界の梨園世家譜では、梅家から梅蘭芳までが三代目、梅蘭芳の九人目の息子である梅葆玖は梅家の四代目である。京劇梅派芸術の三代目、梅葆玖男旦の弟子である胡文閣は2001年に梅葆玖について芸を学んで、半世紀近くにわたって唯一の梅派男旦の後継者となった。現在は北京京劇院梅蘭芳京劇団の主演を務めている。